



軍隊と地域の関わり ～徴兵制を例にして～

皆さんは、軍隊を身近に感じられたことはあるでしょうか。

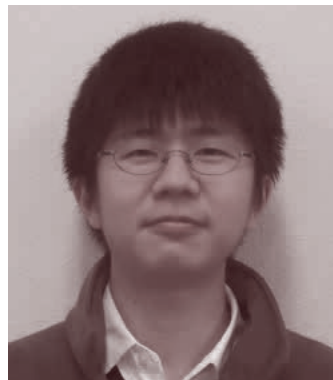
現在の常陸大宮市の範囲には、明治維新以後の近代に軍隊の基地が置かれたことはありませんが、近代の日本ではほとんど全ての人が軍隊との関わりを持つ事は避けられませんでした。そしてその関わりとして代表的なものが徴兵制です。

原則として全ての男子は20歳になった時に必ず徴兵検査を受けなければなりません。この対象になる人をまとめた壮丁名簿というものが、毎年各市町村の役場で作成され、それを元に検査が行われました。

では、実際には毎年どれくらいの人が軍隊へ入っていたのでしょうか。時期や状況により大きく異なりますが、例えば大きな戦争が無い時期の大正13(1924)年に旧大宮町では、徴兵検査を受けたのは20人、このうち実際に陸軍へ入ったのは3人だったと報告されています(「自大正十三年至大正十五年 大宮町事蹟簿」(大宮町役場文書211、常陸大宮市文書館所蔵))。この数は思ったより少ないと驚かれるかもしれません。

しかし、昭和12(1937)年に日中戦争が始まり、総力戦としての戦争が深まっていくと次第に徴兵検査を受けた者は、ほぼ軍隊へ入ることになるという状況になっていきます。

男性を軍隊に取られるとその家庭は生活に大きな影響が出ます。市町村役場では、徴兵する人員の家庭環境や経済状況まで調査しており、経済的に貧しく「生計困難ナリ」と把握している家庭からも、徴兵を実施している様子が史料から読み取れます(「現役兵身上調査表」(八里村役場文書411、常陸大宮市文書館所蔵))。



近現代史部会協力員 有蘭 舟仁 氏
(一橋大学大学院生)

しかし、この調査は経済的な支援などに生かされたわけではなく、また徴兵を受けた家庭の生活支援も十分ではありませんでした。

常陸大宮市には、旧八里村を中心として徴兵の業務に使用された史料が残されています。人々がどのように戦争や軍隊との関わりを持ち、受け止めていたのか、史料や証言など、市民の皆さんの貴重な協力を得ながら、今後も調査を進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



▲「徴兵業務に関する史料(常陸大宮市文書館蔵)」

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)